

## 講演要旨

### A 中世文芸と如来蔵——「離見の見」再考を中心に

小川豊生（元摂南大学教授）

中世史家のなかには、ある鍵概念を含んだ一つの語彙を標的にして、そのコンセプトの中核から、中世史全体に及ぶほどの特異な問題をダイレクトに掴み取ろうとする華麗な「方法」を体現した研究者がいる。かつて熱中して読んだ笠松宏至の『徳政令』や『法と言葉の中世史』、勝俣鎮夫の『一揆』等が念頭にあるが、その頃「法と言葉の中世史」のような方法で文学史が成り立たないものかと思ったものである。例えば和歌や芸能ジャンルでも用いられる「気分」「遣心」「離見」「景気」「面影」「機」「風光」「建立」…。いずれも中世人の心の深みや濃密な思考の襲へと誘い込む強度に満ちた言葉ばかりだ。ただし、いずれもその深みへと辿り着くには、当然ながら資料との格闘が不可欠である。例えば見慣れた「気分」の一語も、良遍の『法相二卷抄』に遭遇すれば途端に見慣れぬ語彙へと変貌するだろう。

実法ハミナ種子ヨリ生ジテ種子ヲ薫ズ。薫ズト申ハ己ガ気分ヲ留メテ置ナリ。…如レ此念々生滅スル間ダ、其ノ見ラル、色モ見ル眼識モ、生ズル時ハ必ず各ガ気分ヨリ生ジ、滅スル時ハ必ず各ガ気分ヲノコス。残ス所ノ気分ヲ、色モ心モ皆ナカクレシヅミテ、其カタチヲミガタシ。併、阿頼耶識ノ中ニ落ち集ル此気分ヲ種子ト名付ケテ、此種子ヨリ色心ノ生ズルヲバ現行ト名付ク。

「阿頼耶識ノ中ニ落ち集ル気分」とは何か。中世における「気分」はこうした晦渋な文脈（華嚴・唯識や如来蔵思想）を把握しなければ現代に蘇らせることはできない。このことは、明恵や京極為兼が用いた「遣心」（「遣境遣心」の唯識思想）や、世阿弥が能楽論で用いた「離見」（如来蔵思想）も同様である。ここでは、中世の芸文で用いられる重要コンセプト、特に唯識や如来蔵（「一心」論）を源泉とする言葉のいくつかを取り上げ、いわば「心と言葉の文芸史」のさわりを展望してみたい。世阿弥の独創とされる「離見の見」も、はたしてこれまでの理解で十全か、新たな問題提議の場ともなるだろう。

### B 再び、中世文学史の一隅 — 「秀範」を軸に —

牧野和夫（実践女子大学名誉教授）

中世神道史に重要な足跡を残した「秀範」に関する一、二の資料を近時披見することができた。「秀範一聖海」という相承授受の関係が、弘長年間に遡って成立していたことを証する聖教の発掘である（福田晃氏編『唱導文学研究』最終号近刊所収、伝承文学会例会で発表、2019・5・9）。金沢文庫蔵資料を以て追尋するとき、秀範は釧阿に授けることで、正和三年頃から知られるに至る一学僧であり、「秀範ははじめ室生寺および白毫寺を中心に活躍し、晩年東国へ下向している」（納富常天氏『金沢文庫資料の研究』頁392）という認識が一般であった。

弘長年間頃に下州千葉荘堀内禅堂の聖海への聖教類の書写授受に係わっていた「秀範」を確認することで、かつて全文影印紹介の機会を頂いた家蔵『一完乃題「サン」（梵字）治ウ乃題旨』一卷（『金沢文庫研究』280号 昭和63・3）の巻末に付された相承と「サン」の口伝に新たな息吹が吹き込まれることとなった（『実践国文学』96号近刊所収）。

金沢稱名寺の長老就任の一件にも緊密に係わる「位置」にあったことを敢えて口伝として残した「秀範」を軸に置くことで（このような「位置」は、同じく覚道房円海にも当てはまる）、新たな一隅を推測してみたい。かつて「中世文学史の一隅—慶政（と円海）の周辺を軸に—」（伝承文学会大会 2008・

8) と題して発表させていただいたのは道家・慶政・頼賢・了行を結び縦横に展開する「動き」とその周辺であったが、それに引き続く戒壇院系律の円照・鷲尾金山寺や良含・白毫院などの「動き」についても既に種々資料紹介を行ってきた。今回は、「円海一秀範」を軸にすることで、その末期から南北朝期初期への「動き」とその周辺が係わってくるか、と思う。以上のことを押し進める資料の多くは、地方拠点寺院の資料であり、遑って当該期の東寺が蔵するところの資料であったことも興味深い。

## 研究発表要旨

### 1 『夢の通ひ路物語』における僧侶

森優子（奈良女子大学大学院生）

平安期以降の物語文学において、僧侶は、源氏物語宇治十帖における横川僧都をはじめ、登場人物として大きな役割を果たしてきた。それは『源氏物語』を引き継ぐ、いわゆる中世王朝物語の諸編においても同様である。

南北朝期から室町期に下る頃の成立かとされる長編『夢の通ひ路物語』に登場する「吉野の聖」は、その中でも特に注目すべき存在だと考えられる。

『夢の通ひ路物語』は、蓬左文庫蔵の六巻六冊写本の他に伝本は存しない。この作品は、表現や構想などの面で『源氏物語』からの摂取を他作品以上に多分に行っており、発端と結末が巻物で表される「物語」を包み込むという「入れ子」構造を持つという特徴を持つ。そうして、その点にこの「吉野の聖」という存在が大きな役割を果たすことになる。巻一冒頭で「吉野の聖」は夢の中で、近頃亡くなった権大納言から巻物を渡され、目を通した上で三の御子という人物に渡すように頼まれる。吉野の聖は、権大納言の苦難や三の御子の出生の秘密に着目して巻物を読み進めていくことになる。

横川僧都は、浮舟を保護し出家させた後、薫との関係に際して後悔の念を持ちながらも薫や浮舟のために善処しようと努め、宇治十帖の終盤において大きな役割を持った。僧都という立場にありながら、母老尼や浮舟のためには下山も惜しまない、情を解する人物として描かれる。肉親のために下山するという意味では、『苔の衣』の苔の衣入道もまた同様であり、入道が物語の最終場面で危篤の中宮を救って、物語は幕引きとなる。

「吉野の聖」もまた、物語の終盤において、出生の秘密を知った三の御子を教え導く重要な役割を担っているが、しかし、作品の冒頭部分から登場し、終盤部分の物語を進行する役目を担い、その行く末への苦悩を共有するという設定は、前述の僧侶たちに比しても、物語の構造への関わりが質的に異なったものとなっていると考えられる。

本発表では、この「吉野の聖」が、物語において具体的にいかなる役割を担っているのかを考察し、『源氏物語』や中世王朝物語の他の作品に描かれた僧侶との比較を通して、『夢の通ひ路物語』における僧侶の特質を捉え明らかにしてみたい。

### 2 妙国寺蔵『宝物集』の位置づけ——藤原義孝往生譚の分析を中心に——

北林茉莉代（大正大学非常勤講師）

『宝物集』諸伝本のうち、研究途上にある本が、広普山妙国寺蔵『宝物集』（以下、「妙国寺本」）である。妙国寺本は、一九七二年に宗政五十緒氏・高槻和子氏が紹介し、二〇一五年に山田昭全氏によって全文翻刻された、第二種七巻本系統に属するとされる一本である。

本発表は、妙国寺本の本文および歌順の分析から、妙国寺本の「系統」を再検証し、「系統内の位置づけ」を検討するものである。

まず、『宝物集』七系統全てに共通する藤原義孝往生譚のうち、妙国寺本および一巻本の独自記事である「逍遙場面」を取りあげる。義孝説話は、『大鏡』、『今昔物語集』、『栄花物語』、『日本往生極楽記』、『大日本法華験記』、『後拾遺和歌集』、『江談抄』、『袋草紙』などに見えるが、本文の類似性から『大鏡』

が原拠と推定できる。該当箇所は『大鏡』から個別に派生したものではなく、『大鏡』から一卷本へ、一卷本から再編集を経て妙国寺本へ、という経路が想定される。これは、妙国寺本が「一卷本成立後に編集された伝本」であることを示している。

つぎに、義孝の和歌・漢詩を含む「子におくれて」の段の例証歌群を比較すると、妙国寺本は第二種七巻本系の諸伝本と同じ和歌・漢詩を有するが、歌順が共通しない。歌順については、美濃部重克氏以来、五首一群で列挙される和歌は「前半部に勅撰和歌集入集歌を配す和歌配列基準」があることが知られている。妙国寺本はこの基準に則っていない点、重出歌がある点に留意すべきである。この「歌順の乱れ」と見える箇所が他の場面においても散見される。このことから、妙国寺本は「記述や和歌の共通性から第二種七巻本系統に属する一本」であるが、「歌順から和歌配列基準が作られる以前の草稿本」とであると結論づけられる。

本発表では、義孝往生譚の考察をとおして、妙国寺本の独自性を描出する。妙国寺本は、『宝物集』を考えるうえで重要な伝本であり、今後研究を進めるべき一本である。

### 3 信瑞編『広疑瑞決集』における説話・往生伝の位置づけ

前島信也（国際仏教学大学院大学日本古写経研究所研究員）

『広疑瑞決集』とは、建長 8 年(1256)に法然の孫弟子である敬西房信瑞の手によって編纂された全五巻の問答書である。対論者は諏訪信仰圏内にあった上原敦広であり、その内容は浄土思想や本地垂迹、殺生に関する 25 の問答が収録されている。

この書は予てより、鎌倉期における諏訪信仰や、本地垂迹思想を示すいち資料として注目されてきた。先行研究では、この書に『日本霊異記』や『拾遺往生伝』といった仏教説話集や往生伝が多数収録される点が指摘されながらも、その内容については未だ検討されていない。

また発表者はこの書の現存諸本の書誌学的研究を行い、1 知恩寺所蔵巻第四が鎌倉中期の写本であること、2 大正大学図書館所蔵の青焼五巻本と知恩寺本の比較によって、内容の大きく相違しないことを指摘し、全 5 巻の内容が、概ね鎌倉中期にまで遡ることができるものであることを結論づけている。以上の点を踏まえ、本発表では以下の点を明らかにする。

- (1) 『広疑瑞決集』所引の説話集・往生伝の資料的価値について
- (2) この書における説話・往生伝の役割

(1)については、特に『古事談』『続古事談』の引用箇所に注目したい。『広疑瑞決集』では両書の名称を出さないものの、『古事談』から 10、『続古事談』から 14 の説話を引用する。両書の現存本のうち、古いものでも室町期の抄本・書写本であることから、『広疑瑞決集』は鎌倉期にまで遡ることができる貴重な資料となる。ここでは、その内容を比較し、特徴および両書の古態を提示する。

(2)については、『広疑瑞決集』が説話集から引用するスタンスについて、その書の特徴を巻ごとに異なるスタンスを有することを指摘し、その役割について検討する。

そして総括として、これまでに浄土教や本地垂迹等で個別に検討されてきた内容を総括し、『広疑瑞決集』の全体像を提示し、信瑞という人物がどのような態度をもってこの書を著したかについて言及したい。

なお、本発表は大正大学大学院 2018 年度課程博士論文として提出した内容に基づく。また(1)については 2018 年度大正大学学内学術研究発表会で発表したもの(未活字化)を改稿したものである。